



Title	矢田俊隆教授の経歴と業績
Author(s)	田口, 晃
Citation	北大法学論集, 29(3-4), 469-484
Issue Date	1979-03-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16277
Type	bulletin (other)
File Information	29(3-4)_p469-484.pdf



[Instructions for use](#)

矢田俊隆教授の経歴と業績

田 口 晃

一

矢田俊隆教授は一九一五年（大正四年）七月二三日、三重県桑名市に誕生された。矢田家は北畠氏に仕えた豪族以来の古い家柄であり、又、教授の御祖父の代迄は儒学者を多く出されたという。教授の行任の中に窺われる、温厚な中にも毅然とした姿勢は、勿論大部分は後の学問上の研鑽の中で培われたものであるにしても、そうした家庭環境を抜きにしては考え難いであらう。生地の桑名中学御卒業後、矢田教授は第八高等学校に進学されている。高等学校時代の教授は、御自身の述懐される所によれば、カント、ヘーゲル、ゲーテに親しまれた、哲学・文学青年であられた。そうして培われたドイツ精神文化に対する御関心は、更にその土壌

であるドイツ近代史に向けて拡大し、卒業後、教授は東京帝国大学文学部西洋史学科に進学されることになる。西洋史学科の学生として、矢田教授が主として関心の対象として勉強を進められたのは、ドイツ統一の問題であり、その際に念頭には、ドイツ同様遅れて近代化の過程に入った日本、就中明治維新の問題を置かれていたと言う。卒業論文に「ランケとドイツ統一の問題」を採り上げられた教授は、一九三八年（昭和十三年）優秀な成績で西洋史学科を卒業されると、直ちに大学院に進まれた。そして二年後の一九四〇年（昭和十五年）には西洋史学科の副手に任ぜられている。当時の東京大学文学部西洋史学科の研究室は、既に戦争の渦中にあつて狭量な愛国主義や軍国主義の風潮が跋扈する中で、故今井登志喜教授を先頭に、外に對しては戦争と軍国主義に對する批判の姿勢を崩さず、内にはリベラルな雰囲気をよく保つ

ていた。三年先輩には林健太郎前東大校長が、又、同輩に村瀬興雄現立正大学教授が居り、その外にも経済史の高橋幸八郎、松田智雄氏等とも学問的親好を持ち、そうした関係から、当時は既に研究が困難であったマルクス主義の文献も、共同で良く読まれたり、F・マイネッケの『世界市民主義と国民国家』の第一部を、既にこの時期に翻訳、出版されている。ここに、一方では理念的なものを輪郭鮮やかに描くと同時に、他方、社会・経済構造に対する目配りも効いた、矢田教授独特の裾野の広い政治史研究の姿勢が形成されて行く基盤が培われたと言ってよいであろう。

大学院から副手時代にかけての教授の御研究は、統一を中心としたドイツ近代史に向けてられ、成果の一端を河出書房版『世界歴史』に発表しておられる。

その後、日本大学を初めとする幾つかの大学及び高等学校で非常勤講師を勤められ、一九四五年（昭和二〇年）、敗戦直前に世界経済研究会に研究員として奉職された。

同年八月、日本の敗戦を迎え、既にこのことあるを予知しつつも、尚憂慮の念を抑え難かった先生は、ここに改めて安堵の気持ちと解放感を味われた由である。

一九四七年（昭和二十年）先生は、それ迄非常勤講師を勤めておられた成蹊高等学校（旧制）の教授に就任され、傍ら旧制第一高等学校、都立高等学校（旧制）、東京文理科大学、東京女子大学でも講義を行われ、真に八面六臂の御活躍であった。その間、

先生の講義に列した人の中から、その後研究の道に進んだ人々は、例えば国際関係論の斎藤孝学習院大学教授の如く、現在学界の第一線で指導的役割を果たしているのである。

傍ら、この時期の矢田教授は、「松会」にも所属しておられる。「松会」は、みずす書房の小尾俊人氏を仲介に、当時の若い研究者が各界から相集って結成したグループで、丸山真男、辻清明、猪木正道の諸氏、更には心理学者の島崎敏樹氏等、錚々たるメンバーが毎月集っては、学問交流と親睦を計っていたものである。敗戦直後の、生活は貧しくとも生き生きしていた時期に、矢田教授は、こうした学際的交流を心から楽しまれたのであった。

その後、一九四九年（昭和二十四年）成蹊大学の創立に伴い、先生は同学政経学部教授に就任されている。そして、一九五〇年（昭和二十五年）北海道大学法経学部の創設と共に、先生は、同学部教授として、札幌に赴任された。北海道大学に奉職された理由は、御自身の言葉を借りれば、忙しすぎる東京を離れて落ち着いて研究をお進めになりたかったことと、又、北海道の自然に憧れて居られた為であったと言うが、それはともかく、かくして矢田教授は北大法経学部の一員となられ、創設期の御苦勞をなさることになったのである。

一九五三年（昭和二十八年）八月、法学部の法経学部からの分離独立と共に、先生も法学部教授となられ、現在に至っている。その間、念願の落ち着いた研究生活に専念され、着々とその成果を公けにされて来たことは周知のところであるし、又、政治史第二

部(ヨーロッパ政治史)の講義、及び演習を通じて、多くの学生に歴史に対する眼を開かせて来られたことも贅言を要しないところであらう。

又、この間、矢田教授は長短三度に亘ってドイツ連邦共和国を初めとするヨーロッパ諸国、及びアメリカ合衆国に赴かれ、自らの御研究の深化に務めておられる。

一方、創設後日の浅い北大法学部にあつて、先生は、学部の運営にも一方ならぬ御苦心をして来られた。例えば一九五七年(昭和三二年)以後、二回に亘つて評議員を、六四年(昭和三九年)から六六年(昭和四一年)にかけては法学部長を勤められ、又、七八年(昭和五三年)には北大スラブ研究センター設置準備委員会委員として同センターの設立に尽力されて来ているのである。

その他、学外に於いても、日本政治学会理事を、一九六三年(昭和三八年)から六五年(昭和四〇年)、及び六七年(昭和四二年)から六九年(昭和四四年)の二回に亘つて勤めておられる。

二

矢田教授のこれ迄の御研究は、主に対象の点から見て、これを前期と後期に分かつことができる。

前期の研究対象は、既にいみじくも大学卒業論文の題名「ランケとドイツ統一の問題」が暗示しているように、一つは統一を中心にしたドイツ近代史であり、今一つは、ランケを筆頭とするド

イツ史学史及び史学方法論である。

特に昭和二〇年代の研究は、昭和二十三年、雑誌『哲学評論』に掲載された、瑞々しい「史学方法論」を嚆矢とし、「フリードリッヒ・マイネッケ」(昭和二十四年)、「ランケの世界史観」(昭和二十五年)、「ウェーバーとマルクス」(同)、「ドイツ歴史主義の危機」(同)等圧倒的にドイツ史学史と史学方法論に関する論稿が多い。これらを通じて見出される教授の方法上の立場は、マイネッケ流の理念史や、ランケ流のドイツ政治史の伝統に深い理解を示しつつも、その欠点を社会経済史的な発展法則の中に位置づけることで補わんとされ、しかも尚他方で、マルクス主義歴史学が往々にして陥りがちな、実証性に乏しい安易な図式主義に対する警戒を常に怠らない、という点にその特色を見出すことが出来る。

もう一方の系譜たるドイツ近代史研究に於いて、教授がいわばライトモチーフとされたのは自由主義とナショナリズムの問題であったと言つてよく、その歴史的に複雑な関係を、先的方法的立場——理念史と社会経済史を射程に収めつつ、政治史を叙述して行くといういわば複眼的な方法的態度に基づいて、研究を進められている。例えば昭和二十九年に発表された論稿「フリードリッヒ大王の統治について」を採り上げてみよう。これは、ドイツに於ける自由主義の理念的反対物であり、かつ歴史的前提条件たるプロイセン絶対主義の特質究明を試みた論文であるが、そこで教授は、フリードリッヒ大王の所謂啓蒙絶対主義が、実は完全な君主独裁であった所以を、彼の政治思想を手懸りに析出した上で

(理念的の接近)、更にそれが成立し得た社会的基盤に迄立入って(社会経済史的の接近)解明し、加えてイギリスの援助という国際政治の契機についても既に触れておられるのである。

その後、教授は相当期間、一八四八年三月革命の研究に沈潜されることになるが、この三月革命研究が、前期と後期との分水嶺をなしていると考えられる。

教授御自身の語るところに依れば、昭和二〇年代に力を方法論研究にそがれたことへの自己反省から、具体的な史実の中に分け入って研究を進める必要を痛感し、三月革命研究に向われたとの由である。従って、その具体的研究も、理念史乃至は思想史を一方の極に、又社会経済史を他方の極に置いた、視野の広いものになったことは当然である。

先ず理念史研究の深化は、昭和三二年、岩波講座『現代思想』第三卷所収の、好論文「ロマン主義と民族観念」に於ける、一九世紀初頭のドイツ・ナシヨナリズムの特質の抽出として結実している。

然し、複眼的な歴史認識の方法を是とする教授の立場からすれば、理念史のみに専念したのでは一面的になる筈で、事実、昭和三六年、筑摩書房版『世界の歴史』第一四巻の為に書かれた論稿「ナシヨナリズムの性格」に於いては、同じくナシヨナリズムを対象としながらも、それを歴史の具体相において把えることを提唱され、三月革命を素材に自らその先例を示されているのである。そこでは、教授の視野は、既に所謂ドイツを越えて、オース

トリアに、更にオーストリア治下にあったマジヤール人やスラヴ系諸民族の動向に迄拡大され、そのことによってナシヨナリズムの持つ複雑な性格、即ち一方では民族の解放という形で自由と結びつくが、他方で一民族の他民族に対する抑圧として自由の反対物にも転化するという、いわばヤヌスの又はプロテウスのな性格を、具体的な形で実証することに成功している。ナシヨナリズムのかかる性格は、マジヤール人に抑圧されていたクロアチヤ人が、マジヤール人のオーストリアからの独立運動を抑圧する為に動員されると云った形で異った民族によって攻守所を換えながら担われる場合のみならず、フランクフルトのドイツ自由主義者の如く、同一時期、単一主体に生ずる両義性の側面からも把握されていて興味深い。更に、教授が初めて日本に紹介されたパラッキ―書簡に代表される所謂オーストリア・スラヴ主義の如く、自由主義の性格の勝った変種をも含め、この論文は、宛然一九世紀中葉に於ける中欧ナシヨナリズムの博物館の趣きを呈している。

ナシヨナリズムの持つ複雑な歴史的性格に対するかかる認識が、ハプスブルク帝国研究という後期の教授の研究方向を定めることになったと言つてよいであらう。三月革命研究を、教授の研究生活を前後に分かつ分水嶺と呼んだ所以である。

かくして我々も、教授が後期に為し遂げられた膨大なハプスブルク研究に向ふことになるのであるが、そこに目を転ずる前に、この時期に書かれたもう一つの主要論文「ドイツ三月革命と自由主義」(『政治学年報』一九六四年所収)に注意を払つておく必要

がある。この論文が、教授の前期に於けるドイツ近代史研究の総決算とも言うべき位置にあるからである。ここでは、教授積年の関心対象であったドイツ自由主義の問題が政治史の分脈の中で真向から採り上げられ、その特質と倭小性が、歴史過程の微妙な局面との絡み合いの中で論述されているのであり、第一にテーマの選択の点で総決算の意味を持っている。そして第二に、永年の御研究によって自家彙籠中のものとされた諸家の説を、理念的なものとして社会経済史的なものを政治過程の分析に統合する方法によって有機的に組み合わせることに成功し、初期の分析に見られた三者の統合に於ける種の生硬さは全く姿を消し、調和と均衡の取れた三月革命像が描かれているのであって、分析方法と叙述に於ける完成度の点でも、前期の総決算と呼ぶに相応しいのである。その結果、「一つの試論的素描である」とする御自身の評価にも拘らず、この論文は優に素描の域を超え、ドイツ三月革命を扱った政治史としては、現在に至る迄、最も傑出した通観を提供してくれている。

扱って、後期の矢田教授の研究対象がハプスブルク帝国に移ったことは周知と言ってよいが、移行の端緒は実は既に昭和三四、三五年に見られる。雑誌『スラヴ研究』第三号（昭和三四年）に資料紹介として掲載された「ブラハに開かれた最初のスラヴ民族会議がヨーロッパ諸民族にあてた声明」、及び翌年発表の「パラツキー書簡とオーストリア・スラヴ主義について」（『北大法学部十

周年記念論文集』所収）がそれである。前掲の「ナシヨナリズムの性格」は、そうした研究成果の上に立って、これを、三月革命期の中欧ナシヨナリズムの観点から整理を試みられたものであった。

その後、陸続として発表された諸論稿に於いて、教授は基本的に異なる二つの方向からハプスブルク研究に取り組んで来られたと言えよう。一つの系譜は、岩波講座『世界歴史』に発表された諸論稿で、「ハプスブルク帝国とメッテルニヒ」（昭和四五年）、「オーストリア・ハンガリー帝国の崩壊」（同年）、「ハプスブルク帝国と民族問題」（昭和四六年）がそれにあたる。ここでは、講座の性格もあってか、それぞれハプスブルク帝国の一時期を広く概観する方法が採られている点に特色が見出せるが、そこに却って教授の歴史叙述の特質が鮮明に窺われる様に思われる。即ち、どの論文を取って見ても、歴史の細部迄配慮が行き届き、しかも全体として極めて良く平衡が取れている上に、理念史と社会経済史が政治史的把握の中にみごとに融合しており、その結果全体の叙述に於いて間然するところがないのである。我々はここに、教授の初期に形成された方法的態度が、既に円熟の境地に達している事実を容易に見とることができよう。

他方、教授の関心が多民族国家としてのオーストリアに、換言すれば複雑な民族間の諸関係、及びそれが帝国全体との関係で織りなす動態の把握にあったことは先に述べたところから明らかであるが、これに様々な側面から取り組んで来られた諸成果が、

後期の教授の御研究のもう一つの系譜をなしている。

まず、昭和三八年発表の「オーストリア社会民主党と民族問題」(『スラヴ研究』第七号)が最初に挙げられよう。ここで教授は、元來が國際主義の立場に立っていた社会民主党ですら、オーストリアに於いては民族問題に正面から取り組まざるを得なかった所以、そこからK・レンナー、O・バウアーの所謂「文化自治論」が形成され、然し、それでも結局、オーストリア社民党がハプスブルク帝国に於ける民族問題の進展に有効に対処し得なかつた事情を丹念に追跡しておられる。

更に、昭和四七年から四八年にかけて発表された長大論文「ハプスブルク帝国の統合と分解をめぐる諸問題——ドイツ民族の立場を中心として」に於いては、帝国の中心的担い手であったドイツ人が、他の諸民族の勃興によってその支配的地位の動搖を感じるや、帝国の支持者から、自民族の特権擁護に汲々とする狭量な民族主義の立場へと転落して行く過程が、主としてチェコ人との対立に即して詳細に論じられている。中でも、一八九七年のパデニー言語令をめぐる対立の過政治化が、それ迄辛じて存続していた紛争の妥協的解決様式を一挙に粉碎し、帝国の持つ統合能力を著しく低下させて行く過程の分析は、政治史の醍醐味を満足させてくれるものである。

ハプスブルク帝国に於ける複雑な民族問題を様々な面から照射せんとする教授の御研究は、次に、ドイツ人に次ぐ支配族であり、帝国の統合と解体の観点からして、決定的な役割を果たしたハンガ

リー・マジヤール人の分析へと進んでいる。それが四九年から五〇年に亘って発表された「オーストリア・ハンガリー二重帝国の構造と特質——ハンガリーの立場を中心に」と題する大論文である。この論文で教授は、ハンガリーの政治的・経済的近代化の過程を、ハプスブルク帝国全体との関連を射程に収めつつ、日本で初めて全体的総合的な形で提示されたのであった。そこでは、二重王国の枠内で進められた一九世紀ハンガリーの近代化によって一方で、大貴族の資本主義的地主への転化と新興ブルジョア階級の没落が生じ、そこから体制の、現状維持のメカニズムが発生すると共に、他方でそれに対抗して、微力ながらも被抑圧民族内のブルジョア階級の抬頭と、労働者・農民の解放運動の発生して来る過程が、帝国の統合と分解の両側面から興味深く描かれている。

こうした系譜に属する第四の論稿が「ハプスブルク帝国の軍隊と民族問題」(昭和五〇年)である。この論文で教授は、皇帝・官僚と並んで従来帝国統合の主要な要素と考えられて来た軍隊に初めてメスを入られた。そして実は軍隊も民族運動の波から無縁ではあり得ず、それに対する有効な対応を欠いた儘、第一次大戦では予想以上の統合力を示しながらも、結局は期待された帝国統合の機能を果たし得なかつた経緯を一世紀近い期間に亘って通観されているのである。

帝国の民族問題に様々な面から切り込む矢田教授の試みの中で

最も新しいものは、帝国崩壊期のドイツ民族の立場、即ちドイツとの併合 (Anschluss) 促進運動に関する研究である。「オーストリア・ハンガリー帝国の解体と Anschluss 問題——一九一八—一九一九年のドイツ系オーストリア国の立場を中心に」(昭和五年)と題されたこの研究では、様々な戦後構想の中から、オーストリア・ドイツ人の手で Anschluss が中心課題として提示されて行く過程、そしてそれが、単に協商国側の拒否だけでなく、ドイツ側の消極性、更には、オーストリア内部の戦後の危機状況を前に挫折せざるを得なかった経緯が、周到かつ明快に論じられている。教授の視野は、片や国際政治の複雑な動態に迄及び、片や Anschluss 運動推進の中心人物たる O・パウアーの戦後構想と思想の立入った分析に迄深められており、その独特の視野と裾野の広い研究方法がここではその威力を存分に発揮していると言えよう。

この間、矢田教授は昭和四二年には『自由と統一をめざして』を出版され、又、ハプスブルク帝国研究のいわば副産物として、昭和四七年には清水書院版『人と歴史』シリーズに『メッテルニヒ』を、五二年には『東欧史』、五三年には『ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史』を書いておられる。就中『メッテルニヒ』は一般読者を対象としたこのシリーズの性格からして、比較的小著の体裁をとってはいるが、配慮の行き届いている点と言い、叙述に於ける過不足ない平衡と云い、蓋しシリーズ中の白眉と言うに留まらず、歴史研究者にとって一つの模範を示すもので

あろう。

我々が大概みに見て来た矢田教授の業績は、それでは、日本のヨーロッパ政治史研究の動向の中でどの様な位置を占めるものであろうか。就中注目さるべきは後期のハプスブルク帝国研究であるが、これは何よりも、従来殆んど関心の対象とならなかったオーストリアに我々の目を向けさせるものであった。その点で、教授を前人未踏の地に初めて斧を入れた先駆者として評価することには何人も異論はあるまい。然し、それに留まるならば皮相の譏りを免がれないであらう。ことはそれ程単純ではないのである。

矢田教授のハプスブルク帝国研究を、明治以降の日本に於けるヨーロッパ史研究の中に置いて見る時、我々は否応なしに次の事実を目を開かざるを得ない。即ち、これ迄の日本人のヨーロッパ研究が大国中心に偏していたという事実である。無論ハプスブルク帝国は歴史的に見れば大帝国内である。然し、明治以降の日本人の眼から見れば、周辺のな位置しか与えられて来なかったのである。その意味では大国と看做されてはいなかった点が一層重要である。つまり、矢田教授のオーストリア研究は既にそれ自体で近代日本人のヨーロッパ認識が大國偏重に陥っていたことに対する批判になっているのである。更に言えば、教授の研究が日本のヨーロッパ史研究に対して持つ批判的意義はそうしたいわば外在的な点に留まるものではない。多民族国家ハプスブルク帝国の研究によって、矢田教授は、一九世紀以後のヨーロッパ史が持つ多層

的で複雑な性格を、具体的史実に即して我々の前に提示されているのであり、そのことは、従来の、大国を中心に形成された一面的なヨーロッパ史像を多面的で奥行のあるものとする作業に教授御自身が既に実際に取りかかり、数歩を進めておられることを意味する。ヨーロッパに於ける周辺の地域の研究を押し進め、ヨーロッパ史像を深化し更には再構成するという大きな課題は今後我々後学を含めて遂行されなければならないものであるが、かかる歴史研究上の大問題に、ハプスブルク帝国研究を以って取り組まれたところにこそ矢田教授の先駆者としての最大の功績が存すると言つてよく、その点は如何に高く評価してもし過ぎることはあるまいと思われるのである。

最後になつたが、矢田教授の業績を論ずる場合、欠くことのできぬものとして、F・マイネッケの著書の翻訳がある。その『世界市民主義と国民国家』第一部を『独逸国民国家発生の研究』なる訳名で昭和一八年に出版されて後、二五年後に『世界市民主義と国民国家』Iとして改訳され、昭和四七年の第二部邦訳出版によって訳業を完成しておられる。実に四半世紀に亘る粒々辛苦の、しかもそのことを感じさせない名訳である。又、小品ながら好著『ドイツの悲劇』も昭和四四年に邦訳出版されている。いずれも達意の日本文になる名訳で我々後学の裨益されるところ頗る大である。

三

矢田教授の研究業績を我々は前・後期に分けて論じて来たが、然しそこに一貫した姿勢があることも明瞭である。我々の見るところでは、それは並勝れた平衡と調和の感覚とでも名付くべきものである。否、感覚と言つたのでは不十分であろう。教授の日常生活態度から学問研究、あるいは教育を貫いて、一見自然な形で現われているこの平衡と調和の姿勢は、その驚くべき一貫性に着目するならば、単に生得の感覚と言つては済まされたい、強靱な精神の存在を想定せしめるからである。嘗て、孔子を目して、中庸を熱烈に説いたと論じた小林秀雄の筆法に倣えば、矢田教授は、平衡を、それが自然な生活態度と見紛う迄に、強い精神力で熱烈に求め続けて来られたと言えようか。

先に掲げた、理念史と社会経済史の政治史への統合という教授の歴史認識に於ける方法的特質も、実はかかる文脈の中に置いて評価されるべきものである。

然し、そうした方法が対象自体から制約される理念史的研究に於いても、例えば「ロマン主義と民族観念」を読めば明らかなように、ドイツ・ロマン主義の民族観念の持つ歴史的進歩性と退化墮落という二側面に対し、一面化による明確化を排除しつつ、尚明晰さを失わずに平衡の取れた評価を与えることに成功しているのであって、ここでも平衡と調和への志向は顕著なのである。

かかる矢田教授の基本姿勢は、更に、方法論の背後に在る教授

の歴史像にも窺うことができる。その点で興味深いのは、教授が私的な会話の席で、「歴史に於けるディレンマやドロドロしたものに関心がある」と漏らされたことと、同じ席でやや語調を強めて「全体との関連を忘れて重箱の隅をつつく瑣末主義は好きになれぬ」と述べておられることである。教授の全研究を背景に置いてみると、そこから、自らは歴史的個性と具体的史実に対して深い共感を覚えつつ、尚、一度はこれをつき放して対象化し、歴史総体の中に位置づけんとする教授の立場、即ち平衡と調和の上に立つ統合的な歴史像探究の姿勢が明らかになって来るであろう。歴史学の現状に対する教授の批判が、一方で専門化の進展に伴って生じる木を見て森を見ない瑣末主義に向けられながら（マイネツケ『世界市民主義と国民国家』1、訳者あとがき）、同時に具体的史実を軽視する図式主義をも衝く（歴史認識の方法について）のはこうした立場の然らしむるところであった。

平衡に立脚する統一的歴史像をめざす立場からする教授の日本歴史学批判は勿論それに尽きるものではない。抑々後期の研究対象にハプスブルク帝国を選ばれたこと自体が、それ迄のドイツ史研究に於けるプロイセン偏重に対する、更にはヨーロッパ史研究に於ける大国主義的傾向に対する批判を意味していることは先述した通りである。現に教授が『ハプスブルク帝国史研究』のあとがきで、「ドイツ史の理解を徹底させる必要からオーストリア史に足をふみ入れた」と述べておられる通り、それ迄のドイツ史研究に於ける「片手落ち」を是正し、統合的なドイツ史像を作り上

げることが教授の目的とするところであった。その際、マイネツケへの傾倒を通じて、並々ならぬ関心を抱いておられたヴァイマル共和国研究を敢えて投げ打って、余人の顧みぬオーストリア研究に赴かれた事実は、教授の中に潜む平衡への意志が如何程のものであったかを示している。

以上述べたところから、教授の平衡感覚が、単に生得の自然と云った類のものではなく、強靱な精神に支えられてきた事情は明らかにし得たと思うが、それが意識的に歴史認識と歴史叙述に導入された経緯を端的に示すものは、昭和二三年という早い時期に書かれた「史学方法論」中の次の一節であろう。ここには、歴史研究者としての矢田教授の美しい信仰告白ベイズトリスも含まれているから、煩を厭わず引用しておきたい。教授は、歴史認識に於ける歴史理論の必須不可欠な所以を説かれ、更にそれを機械的に適用する愚を戒められた後、歴史認識を成立せしめる最後の抛り所は世界観であると断じ、次の様に述べておられる。「世界観とは、決してあらゆる歴史事象を割り切る客観的基準といったものではなく、寧ろ現前の事実と直接巻きこまれることなく、複雑な外的事象と対決してこれを克服し、歴史の真の姿を築き上げるところの強靱な精神力を意味し、歴史家による世界観の樹立ということも、かかる強固な精神力の涵養を指すものにはかならない。……しかしもはや（それは）方法の名に値しないであろう。……いかなる理論も、我々はそれを自己の生活に根ざした深い見識にまで化することが大切である。その上で己れの眼を見開き心を虚しくして歴

史の個性に徹するところに自由と必然の真の關係が浮び上がるのであって、かくして己れの心に感得された真実の生きた秘密を一切の無益な饒舌を排除して、簡潔に美しく、しかも出来るだけ精緻に表現することが、歴史家の最後の、そして最高の仕事なのである。……方法と叙述は二にして実は一なのである。」〔哲学評論〕三一七、一三頁。）

その後の教授の研究を知る者にとって、ここで示された教授の基本的な立場が如何に一貫したものであったか、真に思い半ばに過ぐるものがある。

そうして我々は、教授の歴史叙述の方法と、更には文体さえもが永年に亘る意志的營為の賜物であることに思い至るのである。教授の文体は、その一文が中学生向けの國語の教科書に採用されている事実が示すように、平明さと明晰さに於いて日本文の一つの模範となっているが、かかる平明な文体への努力も、つまりは教授の平衡への意志を裏書きするものではあるまいか。少なくとも歴史叙述に平衡を齎すべく努めて来られた一成果であることは疑い得ないであろう。

これ迄述べて来た矢田教授の業績の紹介に於いて、当を失している箇所や附会に陥っている部分もあるかも知れず、その点矢田教授の御海容をお願いすると共に、教授の御健勝と、更なる研究の御発展をお祈りし、今後も我々後学の蒙を啓き続けて下さることをお願いしつつ筆を擱くことにしたい。

矢田俊隆先生略歴

- | | | |
|-------|--------|------------------------------------|
| 大正 四年 | 七月二三日 | 三重県桑名市において出生 |
| 昭和 七年 | 四月 一日 | 第八高等学校文科二類入学 |
| 昭和一〇年 | 三月三十一日 | 同校卒業 |
| 昭和一〇年 | 四月 一日 | 東京帝国大学文学部西洋史学科入学 |
| 昭和一三年 | 三月三十一日 | 同学部卒業 |
| 昭和一三年 | 四月 一日 | 同大学院に進学 |
| 昭和一五年 | 三月三十一日 | 同二年終了と同時に文学部副手に嘱託される（一八年三月三十一日迄） |
| 昭和一七年 | 二月 一日 | 日本大学講師（非常勤）に補せられる（二二年九月三〇日迄） |
| 昭和二〇年 | 四月一五日 | 世界經濟調査会研究員に任ぜられる（二二年十一月三十一日迄） |
| 昭和二二年 | 五月 一日 | 都立高等学校講師（非常勤）に補せられる（二二年三月三十一日迄） |
| 昭和二二年 | 五月 四日 | 第一高等学校西洋史講師（非常勤）に嘱託される（二二年三月三十一日迄） |
| | 五月三十一日 | 東京文理科大学講師（非常勤）に嘱託される |
| | 六月 一日 | 東京女子大学講師（非常勤）に嘱託される |
| 昭和二三年 | 九月 一日 | 成蹊高等学校教授に任ぜられる |

矢田俊隆教授の経歴と業績

- | | | |
|-------------|-------|---|
| 昭和二四年 | 二月 一日 | 成蹊大学教授に任ぜられる |
| | 三月三一日 | 東京高等師範学校及び東京文理科大学講師(非常勤)に併任される |
| 昭和二五年 | 四月 一日 | 東京教育大学・東京文理科大学及び東京教育大学高等師範学校講師(非常勤)に併任される |
| | | 北海道大学文学部非常勤講師に併任される |
| 昭和二五年 | 四月三〇日 | 北海道大学法経学部教授に任ぜられる |
| 昭和二六年 | 六月 一日 | 北海道学芸大学講師に併任される |
| 昭和二七年 | 四月二〇日 | 北海道学芸大学函館分校非常勤講師に併任される(三一年迄) |
| 昭和二八年 | 八月 一日 | 法学部創設に伴い法学部教授に配置転換される |
| 昭和三一年 | 九月 一日 | 小樽商科大学講師に併任される |
| 昭和三二年 | 四月 一日 | 北海道大学評議員及び協議員に任ぜられる(三五年七月三一日迄) |
| | 七月二五日 | 北海道大学法学部附属スラブ研究施設研究員に併任される |
| 昭和三五年 | 八月一六日 | ドイツ連邦共和国に出張を命ぜられる(三六年一二月二五日迄) |
| 昭和三七年一〇月一〇日 | | 北海道大学入学試験委員会委員を命ぜられる |
| 昭和三八年 | 四月 一日 | 北海道大学大学院委員会委員に命ぜられる(四一年一月九日迄) |
| 昭和三九年 | 一月一〇日 | 北海道大学法学部長に併任される(四一年一月九日迄) |
| 昭和四〇年 | 五月 一日 | 北海道科学技術審議会委員に委嘱される |
| 昭和四一年 | 四月 一日 | アメリカ合衆国に出張を命ぜられる(六月八日迄) |
| 昭和四四年 | 六月 一日 | 名古屋大学法学部講師に併任される(四五年三月三一日迄) |
| 昭和四五年 | 四月 一日 | 北海道大学大学院委員会委員を命ぜられる(四七年三月三一日迄) |
| | 六月 一日 | 北海道大学教職課程委員会委員を命ぜられる |
| | 七月二三日 | パキスタンおよびソビエト連邦に研修を命ぜられる(八月二一日より八月二七日迄) |
| 昭和四七年 | 六月 一日 | 北海道大学入学試験委員会委員を命ぜられる |
| 昭和四八年一〇月一六日 | | 名古屋大学文学部講師に併任される(四九年三月三一日迄) |

料 昭和四九年 三月一六日 北海道大学教養課程特別委員に委嘱される(五〇年三月一五日止)

資 八月 八日 ポーランド、チェコスロヴァキア、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、オーストリア、ドイツ連邦共和国に出張を命ぜられる(九月六日より一〇月六日止)

一〇月一六日 金沢大学法文学部講師に併任される(五〇年三月三日止)

ハプスブルク帝国史研究 岩波書店 昭和五二年

——中欧多民族国家の解体過程——

ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史 山川出版社 昭和五三年

〔編著〕

ヨーロッパの天才たち(山上正太郎氏と共編)

創芸社 昭和二五年

東欧史(新版)

山川出版社 昭和五二年

〔翻訳〕

マイネッケ・独逸国民国家発生の研究

富山房 昭和一八年

マイネッケ・ドイツの悲劇

弘文堂 昭和二六年

マイネッケ・世界市民主義と国民国家I

岩波書店 昭和四三年

マイネッケ・世界市民主義と国民国家II

岩波書店 昭和四七年

マイネッケ・ドイツの悲劇(改訂世界の名著54)

中央公論社 昭和四四年

マイネッケ・ドイツの悲劇(中公文庫)

中央公論社 昭和四九年

〔論文・エッセイ〕

ヨセフ・ハンチュク「ミュンヘン以後のチェコ人とスロヴァク人」訳(歴史学研究一〇—二)

昭和一五年

世界史と歴史学の問題(歴史一六一—)

昭和一六年

ビスマルク時代(『世界歴史』7)

河出書房 昭和一六年

第一次世界大戦と社会的不安——ドイツ(『世界歴史』9)

河出書房 昭和一六年

矢田俊隆教授主要業績一覧

〔著書〕

新編世界史——欧米篇

有精堂 昭和二六年

民主主義への道(世界史の人びとVI)

筑摩書房 昭和三一年

三月革命

弘文堂 昭和三三年

近代中欧の自由と民族

吉川弘文館 昭和四一年

自由と統一をめざして(大世界史17)

文芸春秋 昭和四三年

メッテルニヒ

清水書院 昭和四八年

一人の老歴史家によせて（狼煙一二）
歴史家の仕事（文芸春秋二四一—一〇）

昭和一八年
昭和二一年

民主主義の誕生—ドイツ（世界経済一—二）

昭和二一年

独逸社会民主党の没落の跡を辿る（世界経済一—六）

昭和二二年

ベートーヴェンとその時代（音楽芸術六一—三）

昭和二三年

ワイマール共和制の崩壊（独逸文学二）

昭和二三年

国民主義運動（『西洋史学入門』下）

昭和二三年

ドイツ三月革命について（月刊大学二—六）

昭和二三年

史学方法論（哲学評論三—七）

昭和二三年

ドイツにおける社会主義運動の発達（国民の歴史二—一〇）

昭和二三年

二つの歴史観（思索九）

昭和二三年

フリードリヒ・マイネッケ（『自由主義思想十講』）

昭和二三年

社会思想社

昭和二四年

マイネッケの「ドイツの悲劇」（展望四—二）

昭和二四年

ローザ・ルクセンブルク（『女性西洋史』）

昭和二四年

ランケの世界史観（歴史評論四—一）

昭和二五年

ウェーバーとマルクス（史学雑誌五九—一）

昭和二五年

ドイツ歴史主義の危機（理想二〇—四）

昭和二五年

歴史学（『社会科学を学ぶために』）

昭和二六年

ヨーロッパにおける歴史学の発達（『日本歴史講座』一）

昭和二六年

国民主義運動（『西洋史学大綱』）

昭和二七年

河出書房

昭和二七年

フリードリヒ大王の統治について（北大法学会論集四）

昭和二九年

三月革命（歴史教育二—一）

昭和二九年

マイネッケ教授の逝去を悼む（史学雑誌六三—一六）

昭和二九年

思想・言論の自由とデモクラシー（北大季刊九）

昭和三〇年

ロマン主義と民族観念（岩波講座『現代思想』3）

昭和三〇年

歴史認識の方法について（思想三九五）

昭和三二年

ドイツの歴史（ドイツ語一〇—五六・七・八）

昭和三三年

啓蒙の社会的基盤——政治的地盤（講座『近代思想史』3）

昭和三三年

弘文堂 昭和三四年

ブラハに開かれた最初のスラヴ民族会議がヨーロッパ諸民族にあ

てた声明（スラヴ研究三）

昭和三四年

パラツキー書簡とオーストリア・スラヴ主義について（『北大法

学部十周年記念論文集』）

昭和三五年

ナシヨナリズムの性格（『世界の歴史』14） 筑摩書房 昭和三六年

シヨル兄妹の追悼祭（『世界の歴史』月報6） 筑摩書房 昭和三六年

ベルリン・ダーレムの一日—マイネッケ未亡人を訪ねて— 筑摩書房 昭和三七年

『世界の歴史』月報16） 筑摩書房 昭和三七年

世界史におけるヨーロッパ（『世界の歴史』別巻） 筑摩書房 昭和三七年

フリードリヒ大王（世界史の研究三三） 筑摩書房 昭和三七年

資料

オーストリア雑感(みすず三八)

昭和三七年

現代ヨーロッパの地位と諸問題(歴史教育一一二)

昭和三八年

オーストリア社会民主党と民族問題(スラヴ研究七)

昭和三八年

ドイツ三月革命と自由主義(政治学年報一九六四)

昭和三九年

ベルンハイム「歴史とは何ぞや」解説(岩波文庫)

昭和四一年

一九世紀のナシヨナリズム(『世界の戦史』8)

昭和四一年

人物往来社 昭和四二年

オーストリア・ハンガリー帝国の崩壊(岩波講座『世界歴史』24)

昭和四五年

岩波書店 昭和四五年

ハプスブルク帝国とメッテルニヒ(岩波講座『世界歴史』18)

昭和四五年

ハプスブルク帝国と民族問題(岩波講座『世界歴史』20)

昭和四六年

決断と評価(世界史の研究六六)

昭和四六年

東欧史(世界史の研究六九)

昭和四六年

ハプスブルク帝国の統合と分解をめぐる諸問題——ドイツ民族の

立場を中心にして(北大法学論集二二・二・三)

昭和四七年

オーストリア社会民主党の民族理論(季刊社会思想三二)

昭和四八年

オーストリア・ハンガリー二重帝国の構造と特質——ハンガリー

の立場を中心に(北大法学論集二五・二・四、二六・一・二・三)

昭和四九年

ハプスブルク帝国の軍隊と民族問題(スラヴ研究二〇)

昭和五〇年

昭和五〇年

昭和五〇年

昭和五〇年

一九一九年のオーストリア社会民主党とハンガリー・ソヴェト共
和国の関係(北大法学論集二七・三・四合併号) 昭和五二年

オーストリア・ハンガリー帝国の解体と Anschluss 問題——一
九一八—一九一九年のドイツ系オーストリア国の立場を中心に
(西洋史学一〇四) 昭和五二年

〔学界動向〕

昭和十三年度におけるわが国西洋史学界の状況(史学雑誌四八—
五) 昭和一四年

一八四八年のドイツ革命の研究について(歴史学研究一三六)

昭和二三年

「一九世紀のハプスブルク帝国における民族問題」に関する国際
研究会議(史学雑誌七六一三)

昭和四二年

アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況(スラヴ
研究11) 昭和四二年

『日本における歴史学の発達と現状』——ドイツおよびロシア(東
・中欧を含む) 東大出版会 昭和四四年

西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況(スラヴ研
究一六) 昭和四七年

史学雑誌「回顧と展望」 昭和三二、三九、四二、四五年

(雑誌)

河合栄治郎「独逸社会民主党史論」(北大法学会論集一)

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

昭和二六年

H・ラスキ・笠原美子訳「現代革命の考察」(史学雑誌六〇一七)

昭和二六年

H・ラスキ・山村喬訳「共産党宣言への歴史的序説」(史学雑誌六〇一七)

昭和二六年

トルレチ・西村貞二訳「ヨーロッパ精神の構造―ドイツと西欧―」

昭和二七年

(史学雑誌六一一一)

昭和二八年

林健太郎「史学概論」(史学雑誌六一一一)

昭和二八年

井上正蔵「ハインリヒ・ハイネ」(歴史家二)

昭和二八年

篠原一「ドイツ革命史序説」(国家学会雑誌七一三)

昭和三二年

宮田光雄「西ドイツ―その政治的風土―」(法学二九一三)

昭和四〇年

ジャーク・アンセル・山本俊朗訳「スラブとゲルマン」(史学雑誌七四一〇)

昭和四〇年

岸田達也「ドイツ史学思想史研究」(史学雑誌八六一三)

昭和五二年

柴田三千雄・成瀬治編「近代史における政治と思想」(史学雑誌八六一八)

昭和五二年

(新聞)

ブルクハルト「世界史的考察」(日本読書新聞)

〔啓蒙的講座・叢書・その他〕

バルカン戦役(『世界文化史大系』21「大戦前の世界」)

西洋の状態(『日本文化史大系』11「幕末維新文化」)|今井登志喜氏と共同執筆

喜氏と共同執筆

オーストリア・ハンガリアの事情(『世界史大系』13「帝国主義と第一次世界大戦」)

誠文堂新光社 昭和一五年

誠文堂新光社 昭和三三年

フリードリヒ大王(『西洋史物語』5「パリの赤い血」)

河出書房新社 昭和三四年

国民的統一国家(『図説世界文化史大系』10「ヨーロッパ近代」)

角川書店 昭和三四年

国家の形成とその歩み―ドイツの歴史的歩み、オーストリアの歴史(『世界の文化地理』10「ドイツ・オーストリア」)

講談社 昭和三九年

市民革命時代の展望・フランクフルト国民議会(『世界歴史シリーズ』16「市民革命」)

世界文化社 昭和四四年

ハプスブルク家、マリア・テレジア、ヨーロッパ各地の王室(『世界の文化史蹟』15「ヨーロッパの宮殿」)

講談社 昭和四四年

十九世紀前期のヨーロッパ・アメリカ、ウィーン体制の成立、座談会・ゆらぐ旧体制(『日本と世界の歴史』17)

学習研究社 昭和四六年

ドイツ帝国の成立と発展ほか(『世界史の基礎知識』)

有斐閣 昭和五二年

〔新聞の評論・解説・コラムその他〕

朝日新聞、北海道新聞、日本読書新聞

北海道新聞「魚眼図」

昭和三八年—現在

〔事典執筆項目〕

『世界歴史事典』（平凡社）

『綜合世界歴史事典』（時事通信社）

『世界大百科事典』（平凡社）

『ジャポニカ大百科』（小学館）

『グランド現代百科事典』（学習研究社）

『ブリタニカ・国際大百科事典』（TBSブリタニカ）

『政治学事典』（平凡社）

『哲学事典』（平凡社）

『現代世界百科大事典』（講談社）

『世界史小事典』（山川出版社）